

## 平家物語

大森 海太

近ごろは加齢のためか、本を読むことが少なくなってきた。まとまったものを読み通す根気がなくなってきたのか、老眼が進んで読むことが煩わしくなってきたのか、それとも読みたいと思うようなものが見当たらなくなってきたのか。

以前は古今東西の歴史に関する本やら内外の多くの作家の本も乱読したが、今さら読み返す気にはならない。掌編小説や読もう会の諸兄弟みなさんには申し訳ないけど、新しい作品も気が進まない。

いっぽう新聞の広告や書評には、現代社会の諸問題に関する新刊書などを見かけますが、昨今の難しいことは息子たちに任せておいて、爺さんはゆっくりと古典にでも親しんだほうがよさそうだ。

それならば例えば大物のトルストイかドストエフスキーあたりにチャレンジしようかとも考えたが、どう見ても重たいし、だいいち背景にある原罪などと言コトバう観念にはまるで疎い。もっとほかに何かないのか？

そんなとき偶然ひらめたのが『平家物語』だった。祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。これだ、これならわがDNAにも抵抗がない。M子さんが源氏物語ならこちらは平家物語でいってみよう。

以前、橋本治の『双調平家物語』リキでしりやは読んだことがあるし、林望先生の『謹訳』もあるが、やっぱり琵琶法師の語り口は原文でなければ味わえない。というわけで購入した文庫本全四冊は、右のページが本文、左にはていねいな註釈がついている。

註を頼りに読み進むうちに平安末期の都の世界に引きこまれる。入道相国こと清盛を頭とする平家一門の栄耀栄華は、奢れるもの久しからず、清盛が没し平家は衰え、後白河法皇も絡んで源平の争いへと発展、最後に残った建礼門院が一門の菩提を弔い、「みな往生の素懐をとげるとぞ聞こえし」。

多様な民族、文化、宗教が絡みあって興亡を繰り返す世界の歴史については、今までも多くの本を読んできたが、それとは全く異なる日本の中だけの物語。これはこれで見じっくりお付き合いしてみるのも悪くない。